

2015 年度 第 31 回

在日アジア人留学生への研究補助

受給生紹介



東京・三田の慶應義塾大学にて

RASAーアジアの農村と連帯する会  
Rural Asia Solidarity Association

氏名 包 海清 (ほう かいせい)  
出身 中国 (内モンゴル)  
大学 東京学芸大学  
研究生



### (留学目的)

①ここ最近の中国経済の発展に伴い、国民生活の水準も同様に上昇している。その結果、美術という授業も重視され始めてきたが、今までの美術授業の理念や方法が時代に合わなくなっているのが厳しい現実である。②私が生まれ育った内モンゴル自治区内の美術教育レベルは必ずしも楽観することができない状態にあり、美術教師として勤務した際には、様々な深刻な課題に直面しました。③そこで、美術教育に関する、自分の知識を、より一層豊富なものとし、美術実技の経験をさらに積み重ねるために、美術教育の先進国である日本へ留学することになりました。

### (研究課題)

研究生の一年間で、小中学校の技術教育と銅版画技法について研究する中で、それらに関する基礎的な研究として、出来るだけ多くの授業参観を行い、教育実践や教育環境に対する理解を深めると同時に、銅版画の技法について、さまざまな表現方法を学び、学校教育における創作活動の重要性について研究したいと思っています。

氏名 申 舌禾 (しん そるふぁ)  
出身 韓国  
大学 中央大学  
文学研究科博士課程前期課程



### (留学目的)

「人間は拳を固く握りながら笑えるものではない。」という『人間失格』の一文章のように、変わらない人間の本質を追及した太宰治の作品に惹かれて留学を決めました。太宰治の作品の大部分は人間の醜さや弱さを如実に語ります。それは日本の独特の私小説の形でもあります。私たちには人間のそういう暗い部分を理解することも重要だと思います。しかし、そのような作品が苦手な韓国人もたくさんいるはずで、私が研究生として山下先生と勉強するうちに、韓国ではメラコリーの代表作家として知られている太宰治が、実はユーモアが溢れる作品もたくさん書いたことを知りました。そのため、私は、太宰治のユーモアが溢れる作品を扱って、その中に潜んでいる意味を掘り出したいと思います。これは韓国人にとって、より優しく、太宰治の作品に、もしくは、日本の私小説に触れる方法の一つになると思います。今、韓国の大学では人文学の衰退が問題になっています。人文学は、人間を考える学問だと思います。二人以上の人間は関係を持つようになり、その関係の円満のために人間を考え、理解する必要があります。人文学は、現在の全世界的に崩れやすい関係と疎通方法の中で生きている私たちにとって、より重要で必要な学問だと思います。だからこそ、私は、研究者になり、日本文学を通じて、人文学の重要性と、そのために私たちが思うべきことを韓国の人々に伝える人になりたいと思います。

### (研究課題)

私は太宰治の『御伽草紙』に見られる滑稽と太宰の世界観について考察したい。『御伽草紙』の意義として、まずは『御伽草紙』が初期と後期の憂鬱な作風と違って、太宰治の特有なユーモアが見られる滑稽物語であることである。そのため、『御伽草紙』に用いられたユーモアの方法を分析し、その効果について研究したい。次は、その当時が戦時中であつたにもかかわらず、国策文学ではなく、自分の世界観や文学観を表したことである。太宰の中期の作品は殆ど戦争の時代と重なっていて、国策文学に熱意を持っていた他の作家等に反して、太宰は自分なりの作品を書き続けたのである。しかし、太宰が国に対して全く無関心ではなかったのが、確かに作品の中では戦争についての言及は滅多にない。その代わり、作品の中に、自分の世界観や文学観を密かに溶け込ませたのである。このように時代の流れと逆の立場を取った太宰の世界観や文学観について検討して行きたい。最後に、その当時は、「「個」から「日本回帰」へ」という思想変化が起こったのである。このような時代背景から、『御伽草紙』は、当時の「近代の超克」や「日本回帰」の時代的な風潮と無縁ではないという意見と、その時代の風潮とは全く逆方向を目指していたという見方で分けられるのである。このような戦争による近代化の意識変化は、『御伽草紙』を理解するのに注目すべきものであろう。あえて、昔話である『御伽草紙』をモチーフにしたのは、当時の日本回帰への意識を相対化させるための仕掛けではないだろうか。

それが本研究の中心の仮説であり、本研究を通じて太宰作品の滑稽さと共に太宰の世界観や文学観をその時代背景に基づいて検討して行きたい。

氏名 Mohammad Raknuzzaman  
出身 バングラデシュ  
大学 横浜国立大学  
環境情報学府博士課程後期  
環境リスクマネジメント専攻



**(留学目的: Aims to come to study in Japan)**

Health risk concerning with trace metals contamination is regarded as a global crisis. The global crises have been changed from individual problems to globalization. My career interest is extensively involved on coastal pollution by trace metals and health risk assessment on coastal people of Bangladesh. To accomplish my career interest, I have to comprehend with modern technologies and education systems. Unfortunately, my country concerning this issue, has not enough capabilities, facilities or any financial assistance to research on that matter. I think, Japan is one of the most technologically developed countries with very good education system. The universities of Japan have highly equipped laboratory facilities with modern infrastructure which helps me to pursue my research smoothly. However, the Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University already provided me such research opportunities, laboratory facilities, unique supervisors and above all quality education to comprehend the structures of risks in the modern world and how to handle social factors that influence the risks in developing countries. Besides, Japanese people are very generous, modest, well cultured and principally helpful which make more comfortable to live there. These are the reasons to choice and come to Japan to continue my higher study.

**(研究課題: Topics to study at present)**

Concentration of trace metals in water, sediment, some commercial fish and crustacean species in the coastal area, Bangladesh and health risk assessment.

Trace metals contamination in coastal ecosystem has become a great problem in Bangladesh. My research was basically focused on the determination of seven trace metals concentration (Cr, Ni, Cu, Zn, As, Cd and Pb) in surface water, sediment, fish and crustaceans samples collected from Bangladeshi coast. The metals were detected by ICP-MS after microwave digestion. Water of Cox's Bazar hatchery site was more contaminated. The elevated concentration of As was observed in water sample of Chittagong ship breaking area. Some metals (Zn, Cu, Pb and As) in water exceeded the international quality guidelines. Sediment samples of Chittagong ship breaking area was more contaminated which exceeded the Canadian Sediment Quality Guidelines. As and Zn were remarkably high in Cox's bazar fish and crab. Crab were more vulnerable to pose health risk than other fishes. High dietary intake of arsenic (As) and lead (Pb) may lead the public health risk. The elevated level of trace metals in this Bangladeshi coastal ecosystem should not be ignored and immediate control measure is recommended.

氏名 Tahuyan Nicholas Pahanggin  
(たふやん にこらす ぱはんぎん)  
出身 フィリピン  
大学 アジア学院  
農業専門課程 研究科



**(留学目的: Aims to come to study in Japan)**

I had an experience of being a student in Asian Rural Institute (ARI, 農業専門課程農村開発科) in 2008 and appreciated the training that I had very much because it strengthened so much my capacity as a trainer of tribal leaders. After I graduated from ARI, I gained much experience as a trainer of sustainable agriculture to the tribal people and have hope to enhance myself in knowledge and skills to serve better to my people who are in need. This made me to apply to the advance course in Asian Rural Institute of 2015. ARI accepted my application and I will be a Training Assistant in Crops and Vegetable section of ARI from March 2015.

As a Training Assistant, I will get practical training opportunities through daily activities of Crops and Vegetable section that is to produce necessary amount of food to feed approximately 70 people daily in ARI. I will also plan to improve my skills as a trainer and coordinator by assisting the 2015 training program for the rural leaders that will start from April, 2015.

**(研究課題: Topics to study at present)**

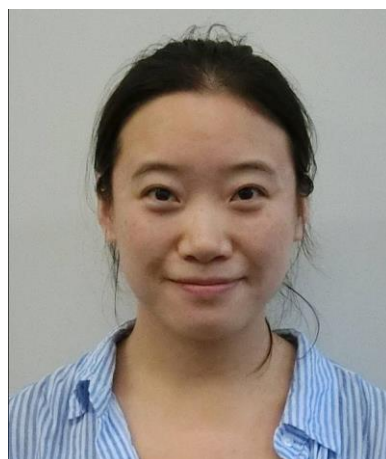
Research Theme: Livelihood improvement of tribal communities in the Philippines by strengthening their food self-sufficiency in sustainable agriculture

**Methods of the research:**

1. Through participating daily in the activities of Crops and Vegetable section of the Asian Rural Institute that is to achieve high food self-sufficiency (producing necessary food to feed approximately 70 people daily in ARI.)
2. By assisting the 2015 training program for the rural leaders that will start from April, 2015 as a Training Assistance and Dorm Coordinator of the Men's Dorm, by which, I will be engaged in whole aspects of the training program management.
3. Having a regular meeting with the Farm and Curriculum staff members of Asian Rural Institute about my research topic.

**How to make use of my learning for my future career:** The organization hopes that I will serve the organization after I go back home in our advocacies towards sustainable and integrated rural development. I am expected to anchor our training team which is responsible for the conceptualization and preparation of training modules that are appropriate and sensitive to the cultures of indigenous communities and at the same time sensitive to the threats or challenges that lay ahead of us such as climate change, biodiversity conservation, organic farming, and indigenous people's rights.

氏名 李 薇 (り び)  
出身 中国  
大学 花園大学  
大学院仏教学専攻  
研究生



#### (留学目的)

日本へ留学した目的は二つあります。一つは中国の仏教研究はまだ大乘仏教を中心とし、仏教原典(サンスクリットとパーリ語の仏典)を研究する学者はわずかである。それに比べ、日本での原始経典の研究は随分進んでいることである。

もう一つは、日中交流史からいうと、仏教は大きな役割を果たしているが、近代の西欧化と共に、中国の仏教研究者のほとんどは西欧の研究成果に注目しているのである。私は日本の貴重な仏教研究成果を重視し、将来には仏教の研究者として、たくさんの日本の学者の貴重な研究成果を中国語に訳し、中国に伝えることを望んでいる。以上の二つの目的により、日本で仏教を学びたいと思う。

#### (研究課題)

今は、主に律蔵における死の種々相を中心として、研究している。律蔵の中で、死の種々相に関する事項、例えば断人命戒の経分別及び他の箇所に見られる人の死に関する律の規定や罪の判定事例などを中心として、歴史変遷の視点から、各律に関する文献を比較研究するものである。また、各律蔵に関する資料間の研究だけでなく、一本の律蔵に絞って、この律蔵内部の経分別を構成する各部分間の関係性も考察する。経分別の各部分は全部同時期に成立したものではなく、異なる時期に成立したものだと考えられているからである。つまり、一本の律蔵の内部にもれきしてきへんせいがあるのである。この視点からの研究も進めたい。以上の二つの方向を基本方針として、研究を進めていく。最終的に、律内部の変遷過程を解明していくことを目的としている。

氏名 莊 子瑩 (CHUANG Tzu Ying)  
出身 台湾  
大学 東京工業大学  
大学院理工学研究科  
研究生



#### (留学目的)

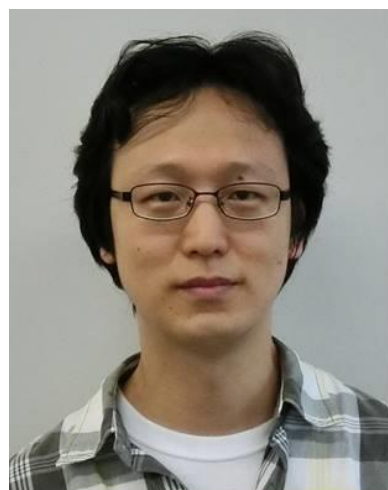
日本・台湾を含め、東アジア地域の各国では少子高齢化が急速に進んでいます。年齢を重ねるにつれて膝関節の痛みがひどくなったり、骨密度の減少が原因で軽微な外力で骨折しやすくなったりする患者が増加しているため、人工骨や人工関節などの需要が激増しています。私の家族も、膝関節の損傷がひどく、階段を昇るのに苦勞したり、長期間薬を飲んだり、手術の医療費に悩んでいる姿を見て、高品質・低価格・安全な人工骨を研究したいと考えました。台湾での勤務先には3Dプリンターの製造装置があり、精密な製品を実際に見て感心しました。自由な形状成形、高い精密、利便性といった装置の機能を、バイオ材料に応用できれば、医師や患者の負担を軽減でき、高齢化社会におけるテーラーメイド医療に大きく貢献できると思います。

日本の工業や医療技術は発展が早く、高齢化に対するバイオ材料の研究も台湾よりも規模が大きいため、日本への留学を決めました。これからは東工大大学院入学を目指して、生体に適合して、実用的な複合材料を研究することが目的です。

#### (研究課題)

3Dプリンターの利点は、その形態制御の自由性・精密性・利便性などであるが、実際の応用を考えれば、適切な材料の選択が一番重要なことです。生体骨は、弾性・じん性・応力といった力学特性のバランスが最適化された精密なものです。生体骨の物性に近い、理想的な人工骨をつくるためには、粉末のサイズ、バインダーの選択、さらに粉末とバインダーの相性、焼成後の生体的合成などがあります。これから、研究テーマとして、3Dプリンター用の最適な材料を目指して、粉末材料の充填やサイズの制御、力学性質の評価などを検討したいと思っています。

氏名 呉 永台 (OH Yongtae)  
出身 韓国  
大学 東京大学  
総合文化研究科 地域文化研究専攻  
博士後期課程



#### (留学目的)

未だ近代化に遅れた劣等感や、植民地支配によってもたらされた悲しい過去の歴史記憶が残存している韓国の歴史的背景が、バランスの取れた日本史像の形成を困難なものにしてしまっている。私は、かねてよりこのような歪んだ歴史認識が改善されず、今なお継続している原因について強い問題関心を持っており、その問題解決の手段として日韓双方の歴史に通暁すべきであるとの認識に至った。

それ故、日本人が築き上げてきた先行研究の成果を習熟する一方で、独力で一次史料を解釈できる史料読解能力、及び専門知識を得るために日本へ留学することを志した。韓国人である私にとって日本の近代史を研究することが如何なる意味をもち得るのか、という問題意識は常に念頭にある。

#### (研究課題)

私の研究テーマは、幕末維新时期における熊本藩の政治動向である。連邦国家が中央集権国家へと変わっていく幕末維新时期の政治過程を理解するためには、薩長中心の視点を乗り越え、より多面的な視点が必要であると考え。このような問題意識から、54万石の国持大名として独自の政治運動を展開しうる実力を有していた熊本藩を研究対象としている。現在の研究課題は二点。ひとつは、修士論文以来の研究、つまり熊本藩が文久期に展開した中央政局での政治運動を跡付けたものを踏まえた上、元治・慶応期から王政復古を経て廃藩置県に至るまでの熊本藩の具体的な政治行動のありようを総括的に考察・検討していくことである。今一つは、他の藩との比較研究を行うことである。熊本藩研究の成果を生かし、幕末維新时期における有力藩の立場を政治的変革の過程の中に位置づけることを目指したい。今は土佐藩や宇和島藩を比較対象として考えている。



氏名 G. G. Thilakawansa Chandrahilake  
出身 スリランカ  
大学 東京大学  
農学生命科学研究科  
森林科学専攻  
博士課程



(留学目的: Aims to come to study in Japan)

Japan is one of the world's leading nation for innovation and technology. The University of Tokyo remains the most prestigious institution of higher education in asia as well as in the world. I really want to expand my knowledge and skills to be a versatile researcher in forest hydrology, and forest ecosystem management. I joined to the University of Tokyo, because I believe that excellent teaching staff and research facilities in the Department of Forest Science, will be a right place for acheiving my goal. After the graduation, I will utilize the diverse achievements gained, for the betterment of forest hydrology sector not only in my country Sri Lanka, but also for the world.

(研究課題: Topics to study at present)

My Ph.D. research title is “Changes in Water Conductance and Evapotranspiration of deciduous oak (*Quercus serrata*) in relation to Japanese oak wilt (JOW)“. JOW is caused by an Ascomycetes fungus *Raffaelea quercivorus* vectored by an ambrosia beetle, *Platypus quercivorus*, has been intensified in Japan since late 1980s. Previous studies described that the JOW is likely to cause severe impacts on forest ecosystems. However, changes of transpiration in infested but surviving oak trees remain unclear. Thus, my experiments aimed to clarify the changes in evapotranspiration in JOW affected forest watershed in order to predict long term hydrological implications.